しゃくなげ

長崎県社会教育主事等連絡協議会

会報　第50号

ご挨拶

長崎県
社会教育主事等連絡協議会
会長　田口　享史

昨年4月1日に前任者の後を引き継ぎ、会長として1年間務めさせていただきました。

私自身、社会教育に携わるのは12年振りであり、この1年間、改めて社会教育や生涯学習について、学ぶ機会をいただきました。

ご承知のとおり、私たちを取り巻く環境は、日々急激なペースで変化しており、社会問題が山積しております。

身近に感じることとして少子高齢化や過疎化がございます。

南島原市の近年の中学校部活動は、部員不足や合同チームの増加に加え、部活動離れや競技の専門性を有した教職員の不足など、様々な課題を抱えており、学校だけで解決することが難しくなっています。南島原市が進める地域展開は、豊かなスポーツ・文化活動を持続可能なものにするために、子どもを中心に考え、「子どもがやりたい地域クラブを選べる環境」、「先生たちも自分が指導したい種目を選べる環境」、「地域の指導者と一体になった、地域クラブの設立による魅力ある環境」の構築を、令和8年度末までに、平日を含めて地域活動となるよう進めているところです。

部活動に代わる新たな南島原モデルを創り出すことが小・中学校、地域及び関係団体を繋ぎ、子どもや地域の方々、先生たちが生き生きとスポーツや文化活動に親しむことができ、南島原市の魅力になると信じています。

また、地域展開の施策として地域クラブの支援や学校と連携を図るための組織の設立、指導者の確保、移送サービスの実施など課題に向き合っている中で、社会教育の重要な役割を改めて認識しました。

地域クラブや社会教育機関との連携、地域住民の参加を促進することにより、地域全体で子どもたちを支える体制が形成されます。

社会教育の視点を取り入れ、競技力の向上に加え、子どもたちの社会的成長や地域とのつながりを育む重要な活動となります。

また、本県では未来を担う子どもたちを健やかに育むため、学校・家庭・地域が連携・協働して、地域総がかりで子どもたちを育む地域学校協働活動が推進されています。

この活動は、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるとともに、「学校を核とした地域づくり」を目指して、地

域と学校が相互にパートナーとして連携して行う活動であり、今後ますます重要になってまいります。

会員不足や運営の負担などが懸念される各社会教育団体においては、学校や地域に介入していくことで、存在を広くアピールし、必要性や重要性を理解してもらう、何より楽しく活動している様子を見てもらうことが、各団体の維持や拡大につながっていくものと思います。

社会教育は単なる知識の習得にとどまらず、人としての成長や、地域社会の発展に大きな役割を果たしています。

本協議会において、県内の関係者が集い、今、何をなすべきかを学び、意識を高め合い、連携を深めることは、非常に意義深いものです。

私たちの取り組みが、少しでも社会に貢献し、また、新たな気づきや学びの場となることを心から願っております。

改めまして、皆さまのご支援に感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご協力を賜りますようお願い申し上げます。

「あなたが大切、私も大切」

長崎県県民生活環境部
人権・同和対策課
教育研修班　稲本　信也

先日、ある「子育て支援教室」に参加する機会をいただきました。この教室は、様々な環境の変化で、子育てに悩む親御さんが、民生委員さんに相談したことがきっかけで立ち上がったとのことです。結成されて、かれこれ三十年余りが経つそうです。傍で眺めていると、民生委員さんたちが、訪れるお子さんや親御さん一人ひとりに、「よう来たね。ありがとう！」「待ってたよ～」などと声を掛けながら、笑顔で温かく迎えておられました。互いが信頼関係で強く結ばれていることを感じることができました。これまでの実践の積み重ねの賜物だとも思いました。

この教室は、子育て座談会や郷土料理、地域巡りピクニックなど、子育て中の親御さんたちの思いや願いにそった多様なプログラムが準備されており、その回数は年に十九回に及ぶそうです。目的・内容といった講師との調整や、子供の見守りサポート等は民生委員さんが担っています。親御さんたちは、「いつでも相談ができたり、教室に参加したりできる環境があるから安心。みなさんと仲良くできるのも嬉しい。」などの感謝の言葉を語っておられました。

私は、親御さんたちの「安心」という言葉は、「よう来たね。ありがとう！」「待ってたよ～」から生まれているのではないかと思いました。悩みを抱える親御さんたちを丸ごと受け入れる土壌に裏付けされた、人を大切に想う言動が、人と人をつなぎ、不安や悩みをやわらげているのだと感じました。

当日のプログラムは、絵本の読み聞かせでした。子供たちが親御さんの顔を見ながら一緒に笑ったり、その後、家でのお子さんとの過ごし方を互いに話し合ったりしていました。まさに、講師との出会いと対話を通して、参加者と講師、参加者同士がつながる姿を垣間見ることができました。参加者が、昨日までの自分に今の自分を重ね、感想を語り合う場面もあり、出会い

と対話、振り返りが、仲間づくりと自分づくりにつながる学びの場となっていました。

たった一日の参加ではありましたが、民生委員さんが、親御さんやお子さんの笑顔のために、自分たちに何ができるのか想像を巡らせ、親御さんたちの声に耳を傾け、想いに寄り添いながら、愛情いっぱいに活動される姿に感銘を受けました。同時に、私に「学び」と「つながり」の意味を問い直す機会も与えてくださいました。そして、この「学び」と「つながり」を共に築いていくことが、温もりと心の豊かさを実感し、一人ひとりが輝き、住民のみなさんが輝く社会をつくることにつながっていくのだろうと感じた次第です。

さて、私はこの出会いの後、この「子育て支援教室」で講師を担当させていただく機会を得ました。絵本の読み聞かせによるワークショップと人権講話でしたが、皆様のお力になれるよう、精一杯努めさせていただきました・・・。

最後に、本課では、市町・市町教育委員会、社会教育関係団体、学校、企業等とつながり、人権教育・啓発の推進に努めています。皆様方には、引き続き、本課の取組について、御理解・御協力を賜りますよう、この場をお借りして、改めてお願い申し上げます。

活動報告

長崎県社会教育支援
「草社の会」
副会長・事務局長　武次　寛

一　研修会（主催・共催）
※①開催日②出席者数③場所
④講演内容等

春季研修会
①４月19日（総会後）
②42名
③県立長崎図書館郷土資料センター
④地域づくりと社会教育
－公民館の役割－
・講師　多良淳二氏　佐賀県
・フリートーキング

地域の力を考える集い
in　南島原市
①１月25日
②81名
③原城オアシスセンター
④子どもを核に育む地域力
・実践発表
　学校運営協議会
　通学合宿
・講師　江頭明文（草社の会顧問）

社会教育フォーラム
in　佐世保市
①２月１日
②79名出席
③清水地区コミセン
④対話による地域づくり・人づくり・つながりづくり
（実践発表）４事例
小ＰＴＡ、高校生地区青壮年会、自治協議会、
（実践事例ごとの対話）
（総括）

つながりづくりフォーラム
in　東彼
①２月22日
②60名
③川棚中央公民館
④子どもから見える
〈つながりづくり〉

連携・協働の新しいカタチ
○東彼3町からの実践発表
○テーマに沿った対談・対話
の実際

会員の他、県内の市町や県内外の関係者等に送付

五　会員数　一一四名
（令和7年2月末現在）

六　県教育委員会表彰
・教育功労賞受章
永年（14年間）の活動が評価された

七　会員の「技能」発掘のための調査中
多くの会員に加入してもらっているが、それぞれ多種多様な技能をもっていので、発掘し、大いに発揮できる機会をつくりたい。

二　役員会議の毎月開催
・場所　長崎市内

三　県内の市・町教委、各種団体等からの講演・講座、講師要請の対応
※年次、増加している

四　会報の発行（年4回）

各地区ブロックだより

県央ブロック

（諫早・大村市）

「つながりが創る豊かな教育」を進めていくために～

大村市教育委員会
社会教育課　松永　章男

諫早市及び大村市は、令和六年十一月二十九日（金曜日）、大村市中地区公民館において長崎県社会教育主事等連絡協議会県央ブロック研修会兼長崎県社会教育支援「草社の会」（以下、「草社の会」）研修会を開催しました。

今回の研修会は、「「つながりが創る豊かな教育」を進めていくために」と題し、諫早市、大村市の社会教育、学校教育関係者をはじめ、長崎県教育庁生涯学習課の方など、県内各地から31名のご参加をいただきました。研修会の開催にあたり、講師謝礼等について「草社の会」のご協力を賜りました。この場をお借りして御礼申し上げます。

はじめに開会行事を行い、「草社の会」の辻川会長からご挨拶をいただきました。

その後、講師としてお招きした文部科学省ＣＳマイスター　西　祐樹　様から、「地域と学校が創る未来～地域学校協働活動とコミュニティ・スクールの可能性～」と題し、地域学校協働活動の必要性、コミュニティ・スクールがなぜ必要かということを、豊富な事例を元に説明していただきました。

休憩を挟み、「子どもがふるさとを心に刻むために」と題し、研究協議を行いました。

【文部科学省CSマイスター】
西　祐樹　様

各自が活動したり、事業を実施したりしている中で、気になっていることや課題を付箋紙に書き、グループで共有をしました。その後、一つの事例をピックアップし、それに対する解決策、アイディアを出し合い、最後に全体で共有しました。ＣＳマイスターの西　祐樹　様もそのままアドバイザーとして参加され、必要に応じてご助言をいただきました。

全体共有をする中で、課題として「子ども会や自治会の加入が少ない」「近所に住む子どもを知らない」「子どもを失敗させない大人がいる」「子どもの経験不足が気になる」などの意見が出されました。

また、アイディアとして、「子どもに自主性を持たせる」「地域行事を開催する」「沢山の経験をさせる」などの案が出ました。地域と子どものつながりや、子どもの成長に眼差しを向けた意見が多くありました。

最後に、大村市の三浦地区から参加された方が自身の学校や子どもに関わる取り組みを話されるなど、皆様がそれぞれの熱い思いを話され、盛会のうちに研修を終えることができました。

研修会終了後は、参加者有志による情報交換会も行われました。両市の親睦を図るとともに、社会教育、学校教育に携わる方々の資質向上が達成され、充実した研修会となりました。

来年度は諫早市が主管となって研修会を行います。今後もこの研修会がより充実したものになるよう、両市で連携して取り組んでいきたいと思います。

研究協議の様子

佐世保・北松ブロック

（佐世保市・小値賀町・佐々町）

社会教育フォーラム in 佐世保

佐世保市教育委員会
社会教育課　迎　義孝

今回で三回目となる表題のフォーラムを「地域づくり・人づくり・つながりづくりフォーラム」と題して、佐世保市社会教育委員有志の会、長崎県社会教育支援「草社の会」、社会教育士等ネットワークながさきと、市教委の共催により、二月一日（土）清水地区コミュニティセンターにて実施し、市内外から約八十名が参加されました。

このフォーラムは、現代における個人の成長と地域社会の発展に重要な意義と役割を社会教育が担っているとの考えのもと、地域づくり・人づ

くり・つながりづくりの実践者が集い、課題を共有し、互いの学びの成果を生かしながら、「誰一人取り残さない持続可能なまちづくり」についてみんなで考えるという位置づけで開催しました。

まず、参加者全員でトークフォークダンスを通じて「対話」の重要性を学びました。相手の話を遮らずにじっと聞き、沈黙を歓迎すること。グループみんなの人差し指にリングを乗せ、水平を保ちながら上下させるワークショップでは、自分の考えを身近な人に伝えることの意外な難しさを体感できました。

続いて、草社の会の椋本先生の進行により、四つの団体から実践発表が行われました。まず、『猪調小学校伝承部』による猪小キッズ乱舞龍隊の取組は、地域資源をモチーフとしたよさこいの伝承活動で、地域・学校・ＰＴＡの密な連携によって、子どもたちの活躍の機会の継続的な提供と、法被の引継ぎによって子どもたち自身が語り継いでいるという自負に繋がっていました。

『大野地区青壮年会』の取組は、「無理のない範囲で」をモットーに、一時期は会員数が４人にまで減ったものの、地道に声掛けをしながら月見会等のイベントを続け、現在は多数の同世代の親父の方々とその家族の交流の場として定着していました。

『西地区自治協議会』の地域未来塾は、地域の学習支援員による中学生を対象とした学習支援に加え、入試前の面接練習等を実施。合格後、顔を見せに来る子どもたちもおり、地域としてもうれしく感じているが、今後の体制や予算等、取組の持続には課題があるとのことでした。

最後に『松浦高校』による探究活動「まつナビ」について六人の高校生に発表いただきました。地元松浦市の魅力発信をベースに、総合探求の時間を活用して、ジョイフルとのコラボ企画や四コマ漫画の作成、廃校の宿泊場所としての活用の市への提案等、様々な取組を実践されていました。

その後、実践発表をいただいた四つの団体のブースに分かれて、参加者は希望する二つの取組ブースを選んで参加する質疑応答が行われ、各ブースのコーディネーターによるまとめの発表により、実践活動の目的や課題の深掘りを行いました。

最後は本フォーラムのまとめとして、草社の会の江頭顧問から、地元が好きで松浦市内に就職するという松浦高校の生徒の話題に触れ、「故郷を愛する子どもは故郷に愛されてきた子どもでしかない」と総括をいただきました。

スマホとではなく、隣の人との対話を通じて地域と繋がること、想いを地道に丁寧に伝えること、地域の子どもたちに無関心になることなく向き合うこと。そういった大人の姿勢が子どもたちの郷土愛を育み、まちの魅力を底上げし、ひいては持続可能な地域力に繋がっていく…。そんな未来に向けた強い思いが湧き上がってくるフォーラムとなりました。

平戸・松浦ブロック

（平戸市・松浦市）

本市における交流事業

松浦市教育委員会
生涯学習課　田代　純子

本市では、市教育基本振興計画における目標の一つとし

て「たくましさ・やさしさを持つ青少年の育成」を掲げています。そのなかで、児童生徒を対象に多様な学習機会の提供と国内・国外の異文化と相互交流、相互の理解を深める取り組みのひとつとして、交流事業を実施しています。

交流事業は、北海道鷹栖町と北海道福島町、長野県木曽町の国内交流事業とオーストラリア・マッカイ市とモンゴル国・ホジルト郡の国際交流事業を旧市町から行っています。そのなかの国内交流の取り組みについて紹介します。

①生徒学習交流事業

本市にある福島町と北海道福島町、長野県木曽町（旧木曽福島町）が「福島」の名を持つことがきっかけで昭和六十三年から交流が始まりました。

相互に訪問し合い、互いの地域の良さや違いを知り、訪問先の人々との交流を深めることで、広い視野と豊かな郷土愛を持つ人材の育成を図るという目的のもと、中学生を対象に三泊四日の日程で実施しています。

今年度は、八月に両町の生徒十六人を受け入れ、本市の生徒と平和学習や埋蔵文化財センターの見学、船釣り体験など楽しんでもらいました。また、一月には長野県木曽町へ本市の生徒八人を派遣し、学校訪問やスキーなど貴重な経験を味わうことができました。

②ホークス交流事業

本市にある鷹島町と北海道鷹栖町は「鷹」のつながりをきっかけに平成八年から交流をはじめ、生活体験や同世代の子ども達との交流を通じ、広い視野と豊かな個性を持った青少年の育成を目的として小学五・六年生を対象に実施しています。

毎年夏休みに鷹栖町の児童が本市を訪れ、冬休みに本市の児童が鷹栖町を訪問しています。

今年度も八月に鷹栖町の児童六人を受け入れ、ホームステイをしながら、ホストファミリーの児童が通う学校での平和学習や海水浴など五泊六日の滞在を満喫しました。また、一月には受け入れた児童らが鷹栖町を訪れ、スキーや雪遊びなどで交流を深め、初めての経験を楽しみました。

これらの交流による体験学習や社会見学等を通じ、初めは不安だった子ども達も自信となって、参加してよかったと感想をいただき、互いの地域の良さを実感して心に残る経験になったと感じています。

その他にも、一般市民および中高生を対象とした国際交流事業も実施しています。

これからも、人とのつながりを大事にしながら、青少年健全育成のため、交流事業を継続し、子ども達の心づくりの一助となるよう努めていきたいと思います。

島原半島ブロック

（島原市・雲仙市・南島原市）

「島原半島ブロック研修会」

島原市教育委員会
社会教育課　帯田　綾子

令和六年度島原半島社会教育連絡協議会・役員会・総会・研修会・各部会を令和六年八月十九日（月）に開催しました。

通常は、連絡協議会を開催するにあたり、事前に役員会

を行い、研修会のあり方などの打合せを行うのですが、前年度、十月末に開催したところもう少し早い時期の開催をとの要望があったため、急遽日程を調整し、半日間の日程で全ての会議を開催したものです。この対応は、コロナ感染症が流行していた時に同様に半日で会議を開催した経験があったことから、皆さんの協力のもと役員会と総会を同日に開催することが出来ました。ご協力いただき感謝申し上げます。

おかげさまで当日は、二十五人の参加のもと、研修会、総会、各部会とスムーズに進行することができました。

まず、研修会では、長崎県生涯学習課の藤井参事をお招きし、「島原半島の社会教育から学んだこと、そしてこれから」と題して講話をしていただきました。藤井参事ご自身も島原半島各地でそれぞれ勤務された経験があり、時代、年代に応じた対応でご苦労されたことがよくわかりました。研修会の中で、長崎県の社会教育委員がまとめられた社会教育応援メッセージが丁度できたばかりということで、公開していただきました。県の社会教育委員の熱のある応援メッセージを読み、気持ち新たに社会教育を考える機会となりました。

また、研修会後は、総会を行いました。昨年度の事業報告とともに、今年度の事業計画などについて話し合いました。島原半島三市の取り組みについて互いに学び合いました。

総会後は、社会教育部会、公民館部会と文化財部会に分かれて各市の懸案事項について協議を行いました。

社会教育部会では、①令和七年度国民文化祭について　②国民文化祭実行委員会予算について

公民館合同部会では、①市立公民館(文化会館、図書館)管理の外部委託等についてそれぞれ協議し、文化財部会では、各市が抱える現状と課題について協議がなされました。部会で協議された内容は、持ち帰って参考にすべきものが数多くありました。

今後とも三市担当者が連携し、島原半島の社会教育の発展のため、力を合わせていくことを再確認できた会でした。

壱岐・対馬ブロック

（壱岐市・対馬市）

公民館講座の活性化に向けて

対馬市教育委員会
生涯学習課　中庭　美奈子

対馬市では、市民への多様な学習機会の提供や、地域住民の交流促進による地域コミュニティの形成を目的に、公民館を拠点として様々な事業を実施しています。その一環として、私は公民館講座を担当し、企画・運営に携わってきました。公民館講座は、春期と秋期の年2回開催され、市内在住の講師の方々にご協力いただき、手芸や芸術といった趣味の講座から、実用的な知識・技能向上を目的とした講座まで、市民や地域のニーズに合わせて幅広いテーマで開催されています。

恥ずかしながら、私は生涯学習課に配属されるまで、このような公民館講座が長年にわたり開催されていることを知りませんでした。そこで、まず過去の開催状況と周知方法についてデータ収集と分析を行いました。分析の結果、コロナ禍で一時的に減少していた講座数と受講者数は、徐々に回復傾向にあり、受講者数は年々増加していることが分かりました。しかし、参加者の多くは高齢者層であり、学生や子育て世代といった若い世代の参加が少ないという課題が明らかになりました。この課題の要因として考えられるのは主に次の2点です。

まず、周知方法に改善の余地がありました。これまで公民館講座の周知は、市のホームページと広報誌のみで行われており、申し込み方法も電話のみに限られていました。これでは、情報感度の高い若い世代に情報が届きにくく、また、平日に仕事や育児で忙しい世代にとって、電話での申し込みはハードルが高いと考えられます。次に、講座内容に偏りがある点です。従来の講座は、趣味的なものが多く、若い世代や子育て世代の関心を引くテーマが不足しているように感じました。

これらの課題を踏まえ、以下の改善策を実施しました。

まず取り組んだのが、市の公式 LINE や Instagram を活用し、公民館講座の情報を積極的に発信することです。講座の内容を紹介するチラシを掲載することで、若い世代の関心を引くように工夫しました。それに加え、Logo フォームを活用し、インターネットからの申し込みを可能にしました。これにより、時間や場所を選ばずに申し込みができるようになり、若い世代や忙しい世代の利便性が高まったのではないかと思います。

次に、社会的ニーズの高い講座の開催です。相続登記が義務化されるという社会的なニーズに応え、法務局と連携して「相続登記講座」を開催しました。実用的な知識を学べる講座は、これまで公民館講座を知らなかった層の参加を促し、新たな参加者の獲得につながりました。

今後の取り組みとしては、子育て世代の参加を促進するため、親子で楽しめる講座や、忙しくて公民館に通う時間がない方でも参加できるオンライン講座等を企画・検討していきたいと思います。

時代の変化とともに、地域社会が抱える課題も変化していくと思います。これからも市民の声に耳を傾け、地域住民にとって身近な学習・交流の場になる公民館づくりを行っていきたいです。

令和6年度　長崎県社会教育研究大会

【大会テーマ】

つながりが創る豊かな社会教育

分科会報告

東彼ブロック

（東彼杵町・川棚町・波佐見町）

【発表テーマ】

地域資源を活用したふるさと教育の推進

〈指導助言者〉

長崎県教育庁

生涯学習課　山下　慶子

〈事例発表者〉

・波佐見町教育委員会

社会教育班　馬場　真琴

（司会者・会場責任者）

東彼杵町教育委員会

社会教育係　松山幸一郎

〈記録者〉

川棚町教育委員会

社会教育係　安永　友紀

【事例発表】

波佐見町では地場産業である「やきもの」を活かし、波佐見中全学年の生徒を対象に「やきもの文化体験」を実施している。

波佐見町に生まれ育ってもなかなか波佐見焼に触れる機会がないため、郷土愛の醸成に加え、自分たちの町のことや人に触れてもらうことが目的である。

波佐見焼はたくさん同じ器を作るために「型」「成形」「窯元」「商社」による分業制により作られている。

【各学年においての取組】

●1年生

波佐見焼の歴史と現在の状況に関する基礎を学ぶために、まずは講話から始まる。職人技を実際に見学し自分たちで絵付けをやってみる。登り窯での焼成体験もできる。

●2年生

「仕事」としての波佐見焼を知っていく。仕事に携わる方々とのトークディスカッションからは仕事の楽しさややりがい、大変さなどを聞き出すなどお互いに意見交換をする。職場体験もできる。

～生徒からの意見（抜粋）～

・なぜ焼き物の仕事をするようになったか。

・波佐見町で働くことの良いところは。

●3年生

1・2年生で学んだことの集大成。波佐見町のために自分たちに何ができるか「波佐見町をよりよくするために」をテーマに「中学生議会」を開催。町の課題や解決策について提案することで主体性が生まれる。

～生徒からの意見（抜粋）～

・魅力を感じられる波佐見町にするためには。

・波佐見焼をたくさん購入してもらうための工夫は。

・自分の企業を立ち上げるためにどんなことをしてきたか。

【今後について】

3年間を通して得た学びか

ら、自分たちが生まれ育った町のことを深く知ることで好きになり、町の素晴らしさを自慢できる子どもたちを育成していきたい。

【質疑応答】

Q　中学校のカリキュラムに入れ込むにあたり、教育委員会から学校へはどういったアプローチをしたのか？。

A　以前から文化体験はあったが、より深くキャリア教育へシフトしたのが令和4年度から。中学校側においても文化体験の重要性を理解してもらい、授業の枠を調整していただいた。

Q　企画が実施に至るまでの期間や苦労したことは。

A　この事業に対する目的などを波佐見焼振興会と協議し業務委託をした。期間は半年ほどかかった。

【指導助言】

ウェルビーイングという言葉をよく聞くようになったが、幸福感は個人だけでなく、人間関係においても感じるもの。そのためにはつながることが大事である。

今回の事例発表は、地域課題である担い手不足や後継者不足の解決に向け、郷土愛を育む目的のやきもの文化体験を、地域や産業の担い手となる子どもの育成を目的としたキャリア教育へ関連させた点がすばらしい。地域と学校が相互のニーズや課題を、理解、共有したからこそできる取組である。双方向から波佐見焼産業の目的や目標の共有をし、同じ方向を向いて一つの活動に取り組んでいる。このことにより、単なる交流活動にとどまらず、地域づくり・人づくりの要素を含んだ、より価値ある活動へつながっている。この取組においては、活動の場である地域と、教育課程を組む学校、そして家庭の三者間の調整・コミュニケーションが重要である。つながるためには対話が必要である。実践の中でも多くの対話がなされたのだろう。中学生議会では、自分の目で見て、そして感じたことを地域の一員として発言していた。子どもたちはさまざまな立場の方の話を聞き、その時々の思いを自分の中で熟成させて、波佐見町を誇りに思う大人になっていくだろう。

各市町には、自然、人などいろんな地域資源がある。それぞれの地域の強みをどのようにつなげていくか、またどのようなつながりを求めていくか。今回の事例発表からはつながることの大切さを考える機会をいただいた。

長崎・西海・西彼ブロック

（長崎市・西海市・長与町・時津町）

【発表テーマ】

つなぐ子育て　つながる子育て　誰もが安心して子育てできる地域づくり

〈指導助言者〉
長崎県教育庁
生涯学習課　深堀ゆみえ

〈事例発表者〉
enjoy！パパ・ママin元村　クローバー子育て応援隊（時津町）
浦川　幸恵
橋口　春恵

〈司会者〉
時津町教育委員会
社会教育課　尾道　輝寿
長崎教育委員会
生涯学習企画課　西依　貴志

〈記録者〉
西海市教育委員会
社会教育課　白濵　義晴
土本　潤

〈会場責任者〉
長与町教育委員会
生涯学習課　平井　尚輝

【事例発表】

「enjoy!パパ・ママ in 元村」は、若い世代が楽しく子育てできる環境を整えることを目的に、地域住民とのつながりを深める子育て支援事業。平成27年度に時津町の家庭教育学級モデル事業として委託を受け、10年間継続してきた。現在は元村をはじめ左底・野田・日並の4地区で活動を展開している

主な活動内容として、講師を招いた講演会、読み聞かせ、クッキング、外遊びイベントなどを実施し、親同士の交流の場を提供している。過去には管理栄養士による食育、図書館司書による読み聞かせ、地域劇団員による紙芝居、親子クッキングなどを開催し、地域の協力のもと、多世代が関わる子育て支援を実践している。

この活動を通じて、子育ての不安解消、新しい知識の習得、仲間づくり、地域活性化につながる成果を実感している。一方で、参加者の集客、乳幼児保護者のニーズ把握、次世代の応援隊の育成などの課題もある。今後は、LINE等を活用した周知の工夫やニーズ調査を行い、より地域に根ざした活動を継続していく。地域とともに子育てできる環境づくりを目指し、さらなる発展を目指す。

【質疑応答】

Q メンバーは全てボランティアか。また、人数は何名か？

A 無償。活動に対する助成は時津町からいただいている。子守ボランティア10名、実行委員7名　計17名が固定メンバー。

Q 体験活動のニーズのくみ取り方はどのようにしているか？

A 試行錯誤している。たくさん集まってもらえる活動にしたいので、軌道に乗ってきたら同じ体験をしてほしいと考えている。

【研究討議】

グループワークを行い、「誰もが安心して子育てできる地域づくり」のために大切にしたいことについて協議し、次のような意見があった。

・後継者の育成、子どもに体験を提供している点が素晴らしいと感じた。ただ、責任の所在をはっきりさせることが課題とも感じた。
・あいさつでつなげる地域をつくりたい。
・子どもと保護者がいきいきとできる環境を作りたい。

【指導助言】

家庭教育支援として、地域の中で子育てに関する悩みを抱える人と悩み解消のために支援する人のマッチングができることは素晴らしいこと。支援する側と支援される側、両者が幸せになれるよう模索していくことが必要。

五島ブロック

（五島市・新上五島町）

【発表テーマ】

島留学の支援と公民館活動

〈指導助言者〉
長崎県教育庁
生涯学習課　朝長　千恵

〈事例発表者〉
五島市教育委員会
久賀島地区公民館
塩脇　康弘

〈司会者〉
五島市教育委員会
教育総務課　鍋内千亜喜

〈記録者〉
新上五島町教育委員会
生涯学習課　立石　克己

〈会場責任者〉
新上五島町教育委員会
生涯学習課　竹内　睦生

【事例発表】

久賀島地区公民館業務の一つとして平成２１年頃から始まった「久賀島地区放課後子ども教室」がある。子ども教室の実行委員会の委員は、公民館長、郵便局長、小・中学校長、ＰＴＡ会長、民生児童委員、主任児童委員等の計十一名で構成されており、その他にも、支援員・サポーターとして民生児童員４名の方の協力を得て、「子ども教室」の計画、運営を行っている。次に、久賀小中学校では、しま留学制度が平成２８年度に島親２人及び留学生３人からスタートし、本年で９年目を迎えている。五島市の「しま留学」には２つ目的があり、１つ目は、豊かな自然の中で体験活動を通じて心身ともに健康な児童・生徒の育成を図ること。２つ目は、留学生を受け入れることにより、二次離島にある極小規模小学校の存続を図り、島の活性化の核にすること。また、受け入れに当たっては２つの制度を設定している。１つは、ホームステイ型のしま留学で、地方の方にしま親（里親）として協力いただき、留学生をそれぞれの家庭で受け入れてもらっている。もう１つは、家族留学制度で、主たる生計者から離れ、留学生及びその家族が１年間移住して生活する制度である。しま留学が始まった平成２８年度は、しま留学生は３人だったが、年々増えてきている。反面、地元の子どもはいなくなり、令和４・５年度は全校生徒がしま留学生となった。本年度は、１１年ぶりに地元出身の小学生が１名入学し合計９名でスタートした。９月末には、新たに中学２年生が１人留学してきたので、現在１０名となった。このように、しま留学生がいなかったら、既に久賀小中学校は廃校になっている。また、子どもが島にいないと島の活性化がなくなり衰退していくので、まさに、しま留学は「島の宝」と言っても過言ではない。しま留学生はいろいろな理由で全国各地から親元を離れて集まっており、様々な不安があると思う。そこで公民館として子どもたちに久賀島の自然を楽しんでもらおうと、学校や地域と協力しながらいろいろな取り組みを行っており、その主な取り組みが「子ども教室」。本年度は、９回の子ども教室を計画しており、毎回参加希望調査を学校を通じて行い、行事と重なったり、体調がすぐれない場合を除けば、全員が参加している。終わりに、今後の取り組みとして、物づくり教室の実施、子どもたちからのアンケート調査、子どもたちの公民館利用促進、コミュニケーションを図りなが

ら、しま留学生の子どもたちが「久賀島に留学してよかった。」「子ども教室は楽しかった。」と思ってもらえるように、公民館としても学校、地域と協力して、子どもたちが心身ともに健康に育っていくよう、諸活動に取り組んでいきたい。

【質疑応答】

Q　どのような子どもたちが留学してきて、どのようなケアをしているのか？

A　しま留学前は大半の子どもが不登校だった。しかし、久賀島に来てからはみんな休まず登校するようになっている。

【研究討議】

参加者が4つの班に分かれて「地域での子どもとの関わり」について討議を行った。各班とも地域と子どもの関わりについて、実情や課題などを共有し、熟議した。

【指導助言】

マズローの欲求5段階説やこども基本法、こどもの居場所づくりに関する指針の概要を柱にした指導助言をいただきました。

しゃくなげは、「石南花」と書く。大きくて派手な花びらが特徴で気品ある美しさから「花木の女王」と呼ばれている。

花言葉は「威厳」「警戒」「危険」「荘厳」など。

山の奥地でしかみられない花、葉には毒があり簡単には近寄りがたい花であるため「高嶺の花」という言葉の由来にもなった。